ＫＯＢＥの本棚

－神戸ふるさと文庫だより－

第　71　号　　平成24年7月20日

編集・発行　**神戸市立中央図書館**

〒650-0017神戸市中央区楠町７－２－１ (078)371-3351

みなと神戸海上花火大会　（広報課「神戸フォトコレクション」より）

みなとこうべ海上花火大会

毎年八月初めに開催される「みなとこうべ海上花火大会」は、神戸の夏の風物詩になっています。市内のあちこちから見える花火を楽しみにしている人は多いことでしょう。

この花火大会は、いくつかの移り変わりを経て今の形に落ち着きました。

初期の大規模な花火大会には、昭和八年から毎年十一月に開催された「みなとの祭」での「神戸ナイト」があります。防波堤から花火が上がり、電飾船の行列が夜の港を彩っていました。しかし昭和十年の「第三回みなとの祭」を最後に中断されます。

終戦後、「みなとの祭」が復活し、打ち上げ花火は湊川公園、須磨浦海岸、王子公園、中突堤などと場所を移して開催されます。

昭和四十五年、「第三十回海の記念日」を祝して大規模な花火大会が行われました。この年は神戸港としても、ポートアイランドのコンテナバースに第一船が到着した記念の年でした。

この花火大会が、翌年から「みなとこうべ海上花火大会」として神戸の夏の恒例行事となるのです。

ピアニスト小倉末子と東京音楽学校―海外が認めた日本人ピアニスト第一号　津上智実　橋本久美子　大角欣矢（東京藝術大学出版会）

小倉末子は神戸女学院大学に学び、東京音楽学校を経てドイツ、アメリカへ渡り、日本人として初めて海外で認められたピアニストである。

本書は、小倉末子が東京音楽学校の演奏会に初出演してから一〇〇年の節目にあたる二〇一一年に開催された同タイトルの企画展を機に執筆された。

演奏家としてだけでなく、東京音楽学校教授としても活躍し、明治・大正から戦前にかけて日本の音楽界に重要な足跡を残した彼女の華々しい功績とその人物像が、演奏記録等の豊富な資料や写真から浮かびあがってくる。

西神戸の自然歳時記―自然はおもしろい、不思議がいっぱい！　橋本敏明（友月書房）

著者は神戸のラジオ局「ＦＭわぃわぃ」で「耳で聴く西神戸の自然歳時記」のコーナーを担当し、番組終了後もブログに二十四節気ごとの自然や話題を掲載していた。

そのブログや番組でのトピックスを中心に再編集したのが本書。

自然教室のリーダーとして活動する著者が、自然に親しむとはどういうことなのかを具体的に教えてくれる。

平清盛と後白河院　元木泰雄（角川学芸出版）

保元・平治の乱を経て、互いに大きな権力を手にした清盛と後白河院。しかしその関係は次第に対立の様相を深める。

著者は、院の近臣と清盛の対立、清盛の長子・重盛の平氏内での立場等を精査し直すことで、複雑に絡み合う権力構造をつぶさに描く。

皇統の傍系からついに正統となり、幾多の政治的危機にも屈せず、平氏の後の世まで権力を保持し続けた院の強（したた）かさを再認識させられる。

賀川豊彦と孫文　浜田直也（神戸新聞総合出版センター）

コープこうべ創立者として店内にその名が掲げられているが、大正から昭和前半に活躍したこの社会運動家について知る人は現在多いとは言えないだろう。

しかし賀川豊彦は四回ノーベル賞候補になり、当時欧米で「カガワ・ガンジー・シュバイツァー」とまで称された人物なのである。

一九二〇年以降、賀川は十数回中国に渡り、講演やスラムの調査を行い、その間、孫文をはじめ魯迅、胡適（こせき）などと会談し、意見交換を行っている。

これまであまり周知されていなかった賀川と中国との関わりが実証的にまとめられた一書。

句作り千夜一夜　後藤比奈夫（ふらんす堂）

著者が主宰する俳誌『諷詠』の巻頭エッセイ「千夜一夜」ほか計二編のエッセイと、俳句におけるこころや慶弔俳句についての講演予稿をまとめたもの。

俳句の師でもある父・後藤夜半との思い出や、句作生活に入る前の半生、句作りの方法、季題の大切さなど、軽妙洒脱な語り口で綴られている。俳句に対する真摯な姿勢と俳句を詠む楽しさが伝わってくる。

神戸～尼崎海辺の歴史―古代から近現代まで　辻川敦　大国正美編著（神戸新聞総合出版センター）

かつては「西摂」と呼ばれた神戸・阪神地域。多様な歴史が積み重ねられているこの地域について、「海と景観」を切り口に、古代から現代までを十六編の論文で描きだす。

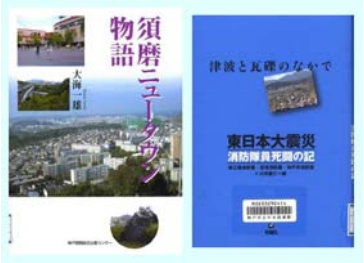
考古学からのアプローチによる古代の人々と海の関わりや、軍記物・旅行記から読み解く戦国時代の風景。吉田初三郎の鳥瞰図から見る近代神戸の景観など多彩な内容となっている。

東日本大震災消防隊員死闘の記―津波と瓦礫のなかで　南三陸消防署ほか編（旬報社）

東日本大震災の発生と同時に、全国の消防隊員は被災地の救援活動に向かった。全国の消防隊による緊急消防救助隊の人数は、被災から二ケ月後には約二万八千四百人にのぼり、全国の消防隊員のおよそ六分の一にあたる。

なかでも神戸を中心とする兵庫県隊には、阪神・淡路大震災の時に助けられた「恩返し」をしたいという気持ちが強かった。兵庫県隊は、長野・福島を経て宮城県山元町へ向かい、さらに南三陸町での救援活動に従事することになる。

この本は、大震災の想像を絶する破壊と被害を前に、混乱する現地で苦闘した消防隊員の生々しい手記である。



須磨ニュータウン物語　大海一雄（神戸新聞総合出版センター）

『西神ニュータウン物語』同様、記録の必要性から作成された。目次には「名谷団地は16カ村の共有地だった」「二〇三高地が3つもあった」などの項目が並ぶ。資料が散逸するなか貴重な古文書や昔話も取材し、写真、図表を織り込んだ明快な構成となっている。

歴史がないといわれてきたニュータウンにも興味深い歴史がたくさん埋まっていることが発見できるだろう。

まちかどの記憶とその記録のために―神戸長田から／へ　共在の場を考える研究会編・発行

「まち」にかかわるさまざまな人の記憶や足跡を調べ、記録し考えるという活動を行っている「共在の場を考える研究会」が、神戸長田を調査した中間報告書。

長田は奄美出身者や在日コリアン、ベトナム系の人々などが多く住むまち。多様な人々を含む調査からは、新たな長田像が見えてくる。

人にとって「まち」とは何かを考えるきっかけを与えてくれる。

＝その他の新刊＝

開拓民―国策に翻弄された農民　宗景正（高文研）

父の微笑　相沢一郎（本の泉社）

自然災害とストレスマネジメント―それでも僕らは歩み出す　磯野清（文芸社）

源平ゆかりの里　福田寺経緯編纂委員会発行

阪神美術探訪　坂上義太郎（光村推古書院）

書庫探訪　その㉗
「清盛公墳墓塔」　『神戸覧古』より

これは、明治34年（1901）若林秀岳によって描かれた風景画帖『神戸覧古』のなかの1枚「清盛公墳墓塔」です。兵庫区切戸町にある十三重石塔「清盛塚」を描いたもので、清盛の墓と伝えられてきました。十三重石塔には、弘安9年（1286）2月という年月が刻まれており、県指定重要文化財となっています。

大正12年（1923）、神戸市電の軌道敷設にともなう道路拡張工事のため、約10メートル南西の場所にあった十三重石塔が現在地へ移されました。その時の調査によって、墓でないことが確認されています。

当館1階と2階に、「平清盛関連コーナー」を設置しています。平清盛に関する資料を集めていますので、ぜひご覧ください。

ランダム・ウォーク・イン・コウベ㉑

六甲山と水害

六甲山地周辺では古くから頻繁に大きな自然災害がありました。それは、主として大雨による土砂災害でした。

「いったい今年は五月時分から例年よりも降雨量が多く、入梅になってからはずっと降り続けていて、七月に這入ってからも、三日に又しても降り始めて四日も終日降り暮していたのであるが、五日の明け方からは俄に沛然（はいぜん）たる豪雨となっていつ止むとも見えぬ気色であった。が、それが一二時間の後に、阪神間にあの記録的な悲惨事を齎（もたら）した大水害を起そうとは誰にも考え及ばなかったので（略）」

これは、谷崎潤一郎の『細雪』の中の昭和十三年七月に神戸市及び阪神間で発生した大水害の前兆を描写した文章です。

七月三日の夕方から降り始めた激しい雨は五日の昼過ぎにようやく治まりました。総降雨量は六甲山では六〇〇ミリ、市街地や阪神間でも四〇〇ミリを超え、たった二日間で神戸市の年間総降雨量の約三分の一が集中して降りました。その結果、六甲山の南側では山くずれが多数発生。住吉川や都賀川などが決壊、道路はあふれた水で川となりました。そして巨大な石や夥（おびただ）しい量の流木や土砂が市内にあふれ、泥の海となり、軒まで土砂で埋まる家もありました。道路も鉄道も寸断され、都市機能は完全に麻痺しました。

神戸市及び阪神間での死者・行方不明者は七百十五名に達し、流失または全・半壊した家屋は一万五千戸あまりにも上りました。都賀川、ついで新湊川流域の被害が大きかったようです。六甲山から流れ出た土砂は五〇〇から八〇〇万立方メートルと報告されており、その崩壊面積は甲子園球場の約二十七倍になったそうです。

六甲山は元々緑ゆたかな山でした。天正年間に豊臣秀吉が大阪城を築城する際、六甲山から巨木や石を採取しました。そして、その代償として「武庫山の樹木伐採勝手たるべし」との布令を出したために濫伐（らんばつ）が始まりました。江戸時代に入ると炊事や風呂の燃料や資材として樹木の伐採が進み、明治初期には地表が露出するほどに荒廃してしまいました。

「私は瀬戸内海の海上から六甲山の禿山を見てびっくりした。はじめは雪が積もっているのかと思った。」

明治十四年、植物学者の牧野富太郎が高知から蒸気船に乗って神戸に着きました。その時、港を背にした六甲山の印象をこう記しています。

都賀川（大石川）中流　省線鉄橋付近

（『神戸市大水害スケッチ』より）

六甲山系の河川は、距離が短く流域面積も小さいうえに勾配もきついので、ひとたび大雨が降れば土砂がいっきに流れ出し被害が甚大となります。神戸の街は急速な都市化により川幅が狭められたり、水路が地下に埋められたりしました。そんな状況のなかで起こった大水害でした。

当時は現在のようにデジタルカメラや携帯電話もない時代でしたが、被害の甚大さを伝える貴重な資料が残されています。

大水害の直後より神戸市初等教育研究会図画部の教員二十三名によって描かれた二百十三枚のスケッチです。この現実を後世に伝えよう、と必死の思いで被災地を巡っています。惨憺（さんたん）たる状況のなかで写真にも劣らない程の細やかな観察で惨状を描き出しています。この被害状況のスケッチをもとに作成された絵巻物もあります。どちらも当館のホームページでご覧いただけます。

この災害をきっかけに神戸の都市計画は水害予防を大きな柱とし、再びこのような災禍が起こらないよう、六甲山系の砂防事業や河川改修を継続的に進めて来ました。そして現在も、樹や森を育て、自然の持つ力を強めて土砂災害を防ぎ、安全で自然豊かな六甲山を目指すという努力が続けられています。

参考図書
『神戸市水害誌』神戸市役所
『六甲砂防六十年史』六甲砂防工事事務所
『牧野富太郎選集』第1巻　東京美術

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

神戸市広報印刷物登録　平成24年度第122-1号
（広報印刷物規格　B-1類）